



城

調整課審査推進室 深草 祐一

 第十回 くまもとじょう
 熊本城

～「清正公に負けた」西郷隆盛に言わしめた名城～

記念すべき第10回には、私の地元の城、熊本城を取り上げます。黒を基調とした豪壮な大小天守は言うに及ばず、独特の反りを見せる武者返しの高石垣など、さすが三大名城の一つと讃えられるだけはある大変見応えのある城です。しかも、築城から2世紀以上隔てた西南戦争の近代戦にも耐えたという実績を思う時、熊本城はいっそう凄みを増して見えてくるのです。

 かとうきよまさ
 加藤清正による築城

加藤清正は豊臣秀吉の縁者で子飼いの武将として大出世した人物です。朝鮮の役では精強な肥後兵を率いて最前線で戦い、苦しい戦況の中で最後まで明・朝鮮軍に打撃を与え得たのは、鬼石曼子と恐れられた島津義弘と、加藤清正だけではないかというほどの戦上手でした。また武辺だけでなく、豊臣秀頼と徳川家康の面会を実現させて豊臣家の保全を図るなど、政治力に長けた人物でもありました。肥後入りしてからは、大規模な河川工事を行うなど領国を安全で豊かにする内政にも力をくだいており、今でも熊本では「清正公さん」と呼ばれて親しまれ、熊本城前の銅像のような高鳥帽子兜の勇姿を知らない人

はいないと言っても過言ではないでしょう。

秀吉の九州征伐により、九州統一目前だった島津は薩摩・大隅二国に押し込まれ、各地に秀吉の家臣達が配置されました。中でも肥後国は小豪族が割拠す



加藤清正公の像

る難治の地であったため、秀吉は小牧長久手の戦いで降伏させた歴戦の武将、佐々成政を入れます。しかし、検地を強行しようとしたことから肥後国衆が一斉蜂起（肥後国衆一揆）する事態となり、成政はその責めを負って切腹。代わって加藤清正と小西行長が南北半国ずつを治めることになりました（関ヶ原後、西軍に与した小西領を与えられて肥後一国に加増）。当時「隈本」と言った地に入った清正は、城を築城し、「熊本」と改めました。築城名人としても知られる清正は、井芹川を坪井川と合流させて天然の内堀とし、白川を外堀として難攻不落の大城郭を築きました。清正は、もし徳川が豊臣潰しにかかるなら、熊本城に秀頼を迎えて一戦も辞さない覚悟だったと言われ、朝鮮の役での経験を生かして構築されたその実戦的な構えの有効性は後の世で証明されることとなります。しかし、清正は秀頼と家康の面会を実現させた帰路で発病、急死してしまい、その後、加藤家は大きな理由もなく改易されてしまいました。このことから、清正暗殺説が根強く、多くの作家が様々に想像力を働かせたストーリーを生み出しています。加藤家の後には、筑前小倉から細川忠利（忠興の子）が入り、明治まで続きました。この際に細川氏は元国主の加藤清正に配慮した対応をとったため、清正公人気は今に続いているのだとも言われています。

 たばるさか
 西南戦争と田原坂の戦い

明治維新後、新政府のやり方に不満をつのらせた士族が各地で相次いで決起する事態となり、佐賀の乱、熊本・神風連の乱、秋月の乱、萩の乱が次々に起こります。

それは薩摩でも同様で、激昂する不平士族は、大久保利通らとの対立により新政府の職を辞して隠棲していた西郷隆盛のもとに集まり、ついに彼らを抑えることができなくなった西郷は、新政府に対して質す事があるとして兵を率いて上京することを決意しました。

薩軍が進軍するにあたり、まず目標となったのが、九州唯一の鎮台が置かれていた熊本城でした。駐屯する守備兵4千に対して、迫る薩軍は1万4千。司令の谷干城は籠城して中央の援軍を待つ方針を固めました。しかし、いよいよ薩軍が目前に迫ろうかという時、熊本城は謎の出火により炎上し、町の中心部も巻き込んで天守閣や多くの櫓群が焼け落ちてしまいます。薩軍が熊本城を囲み、砲撃を開始したのはその2日後のこと。それにも関わらず谷司令のもとで鎮台兵は士気を維持し、薩軍の強襲は、熊本城の堅固な防御構造、最新式の装備と豊富な弾薬の前にことごとく失敗。精強な兵を多く失った薩軍は熊本城の強襲を断念し、包囲軍を残して北上を開始しました。しかし、官軍の征討軍は既に肥後に入っており、ここに両軍は激突します。その中で、有名な田原坂の激戦が行われることとなりました。銃火器の性能では官軍が優位に立っていたものの、薩軍は地形をうまく利用して戦い、そのうえ薩摩示現流の使い手による抜刀攻撃の威力は凄まじく、官軍はなかなか田原坂を抜くことができません。そこで官軍も剣の使い手を集めた警視抜刀隊を組織して対抗し、ようやく互角に渡り合うことができました。そして、官軍は過去最大の兵力を投入して大砲撃とともに雨中の一斉攻撃をかけ、ついに薩軍を敗走させたのでした。

一方、熊本城の鎮台軍を救いかつ薩軍の連絡・補給



西南戦争の激戦地



巨大な空堀と高石垣による堅固な構え

路を断つために、官軍は八代に援軍を上陸させます。官軍は薩軍と激戦を繰り返しながらじりじりと進み、ついに攻囲軍陣地を占領して熊本城に入りました。その間、薩軍は更に背後からの八代攻撃を試みますが、失敗。やむなく各方面から撤退してきた兵力を熊本城の東地域に集めて防衛線を敷き、官軍を迎え撃つ体勢をとりました。そしてここに、両軍が正面からぶつかり合う大規模な野戦が行われました（城東会戦）。しかしながら、一部で薩軍が勇戦したものの、結局わずか一日の戦いで官軍が薩軍を撤退に追い込むという結果に終わったのでした。

ここに至って薩軍は人吉に根拠を置いて薩摩・大隈・日向の三国を確保する戦略に転換しました。ここでも薩軍は多方面から進軍する官軍と田原坂に劣らぬ激しい攻防を繰り返して、何度も官軍を押し返しました。しかし最終的には後退を余儀なくされ、最期の地、鹿児島島の城山へと追い詰められていったのです。熊本城を抜けずに破れた西郷は「官軍に負けたのではなく清正公に負けた」と言ったと伝えられています。

築城400年を迎えた熊本城

西南戦争後に焼け残ったのは宇土櫓と東側の長櫓等の一部だけで、熊本城は長らく石垣だけの城でしたが、昭和30年代の全国的な天守閣再建ブームの中で、大小天守閣が鉄筋コンクリート造りながら古写真や絵図面を元にして正確に外観復元されました。そして現在、築城400年を記念して、本丸御殿や多くの櫓・土塀が木造復元されています。天守閣に周囲の櫓群が加わると、やはり見栄えが格段に違います。平成20年春には本丸御殿の一般公開も始まります。この機会に、全国城郭ファン垂涎の城、熊本城を是非訪れてみてください。